

2023 年度 教育・研究年報

目 次

I 教育・研究年報

【学部】

一般教養	1
基礎看護学領域	3
成人看護学領域	5
老年看護学領域	6
母性看護学領域	8
小児看護学領域	9
精神看護学領域	10
公衆衛生看護学領域	11
在宅看護学領域	12

【大学院】

共通科目	14
基礎・地域連携看護学領域	17
臨床・応用看護学領域	19
看護管理学領域	21
研究科目	22
令和5（2023）年度大学院科目一覧	23

II 個人業績（著書、論文、学会発表）

清水 哲郎	24
大井 慈郎	24
上田 耕介	24
伊藤 收	24
武田 恵梨子	24
三浦 靖彦	25
石井 真紀子	26
添田 咲美	26
齋藤 史枝	26
新沼 伸子	26
江守 陽子	26
大谷 良子	27
佐藤 恵	27
濱中 喜代	27
下野 純平	28
遠藤 麻子	28
大沼 由香	29
越納 美和	29
加藤 美幸	30
太田 ゆきの	30

III 外部資金獲得状況

外部資金獲得状況一覧	31
------------	----

I 教育・研究年報

令和 5 (2023) 年度 一般教養領域活動報告

1. 領域構成

清水哲郎 (教授)、大井慈郎 (准教授)、上田耕介 (講師)

2. 一般教養領域における教育に関する内容と評価

清水哲郎教授は学部では「ケア・スピリット論Ⅰ」(1年生)、「基礎ゼミナール」(1年生)、「ケア・スピリット論Ⅱ」(2年生、濱中喜代教授、石井真紀子准教授と共同)、「人間の生と死」(2年生)、「エンドオブライフケア論」(3年生、濱中喜代教授、石井真紀子准教授と共同)、「臨床倫理」(4年生、濱中喜代教授と共同)を担当した。これらの科目に共通のテキストともなる書籍(前年度刊行)を使った授業を実施した。

大井慈郎准教授は「情報リテラシー」(1年生)、「基礎ゼミナール」(1年生)、「調査と統計」(3年生)、「看護研究方法論」(3年生、大沼由香教授と共同)を担当した。「情報リテラシー」は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキル等を学習するものである。「調査と統計」と「看護研究方法論」については、量的研究に関する範囲を同じ教員が担当することにより、2つの授業を関連させながら展開することができた。

上田耕介講師は、「基礎ゼミナール」(1年生)、「社会と福祉」(1年生)、「家族とジェンダー」(2年生)、「人間と文化」(2年生)、「社会と福祉」(旧カリキュラム、3年生)を担当した。「基礎ゼミナール」では、前期に、主として学術的文書の執筆法を学修し、後期には「感情労働」について講読を行った。その他の講義は、社会の諸問題を看護と関連付けて学修するものである。授業評価によれば、いずれの講義も、ほぼ平均ないしそれ以上の学生の満足度を獲得した。

3. 一般教養領域における研究に関する内容と評価

清水哲郎教授は、本学臨床倫理研究センターの活動として科学研究費助成事業 基盤研究(B)(課題番号 22H00602) 2年目の研究活動及びセンター独自の活動を行った。即ち、1) 要介護となって以降の高齢者ケアをポスト健康寿命期のケアとして、老いによる弱さの進行一般と認知症の進行を対応させつつ検討し、ポスト健康寿命期の長さについて一般に考えられているものが不適切であることを指摘した。2) 臨床倫理研究センター懇話会(オンライン開催3回)、臨床倫理 eラーニングの開発、公開講座、学会講演、医療・看護関係の研修等にて研究成果の発表及び臨床現場への還元を行った。

大井慈郎准教授は、4つの研究を実施した。第一に、科学研究費助成事業基盤研究(C)(課題番号 23K01730 代表者:大井慈郎)として、岩手県内各市町村社会福祉協議会協力の下に高齢者サロン代表者に対するアンケート調査を実施した。第二に、同基盤研究(B)(22H00602 代表者:清水哲郎)として、介護予防事業参加者に対する量的調査法の検討を行った。第三に、同基盤研究(B)(課題番号 23H00871 代表者:永吉希久子)として、日本へ技能実習生を送り出しているインドネシアの状況について情報収集を行った。第四

に、学内共同研究（代表者：磯島実奈）として、北東北三県の保健師に対するアンケート調査を実施した。

上田耕介講師は、これまで継続していた新自由主義の問題を考察する研究の一環として、Michael Mann の歴史社会学を、マルクス主義の帝国主義論やウォーラステインの世界システム論と対比させ、資本主義の存続可能性の観点から整理した。その成果は、第69回東北社会学会大会において、自由報告「マイケル・マンの『帝国主義』論」として発表した。

以上

令和 5 (2023) 年度 基礎看護学領域活動報告

1. 領域構成

土田幸子（教授）、伊藤收（教授）、野中みつ子（助教）、山田英子（特任助教）、武田恵梨子（助教）

2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

本年度は、14科目を担当した。1年生では早期体験実習、看護学概論、基礎看護援助論、生活援助技術論、ヘルスアセスメント、看護理論、生活援助実習を、2年生では療養援助技術論、看護過程論、療養援助実習、4年生では看護管理論、総合実習、救急看護論、通年科目として卒業研究ゼミナールを担当した。新カリキュラムでは専門科目が2年前期から開始となるため、1年前期は看護学概論、後期はヘルスアセスメントを先行し、2年前期は看護過程論を先行するよう科目の進度を考慮して計画し実施した。

1) 専門科目について

(1) 講義・演習について（1年生）

早期体験実習は、3施設を担当した。1年前期の看護学概論を土田幸子教授が担当し、看護実践の構成要素である「人間」「環境」「健康」「生活」を中心に展開した。さらに、看護の歴史的発展過程を講義し、ナイチンゲールの看護についてグループワークを中心に展開し、成果発表会を設け成果を共有することで学修を深められた。基礎看護援助論は、主な看護技術とは何か、看護技術の基盤となるコミュニケーション、ボディメカニクス、感染予防、バイタルサインズについて講義と演習を組合わせて教授した。演習は、学年を2つに分け3人グループとし、きめ細やかな指導ができるよう領域の教員4人と非常勤指導者2人で2グループ程度を担当し実施した。演習前には課題を提示し、演習開始直後にグループ内で課題の内容とその日の展開についての打合せを行ってから開始するようにした。終了前には、グループ内で演習の振り返りを行い、自己評価につなげられるようにした。バイタルサインズ測定については実技試験を行い、再々試験まで実施した。

後期はヘルスアセスメント・生活援助技術論は全教員で講義を分担し、演習は前期と同様に展開した。ヘルスアセスメントを先行させて、対象の全身状態のアセスメントの修得を目指し、それを活用して生活の援助ができるように組立てた。生活援助技術論の演習では、前期で実施したバイタルサインズ測定を各演習開始前に実施し記録することを課した。実技試験は生活援助実習を想定し、環境調整と清潔の援助を中心に、就床患者の状態把握のためにバイタルサインズ測定を実施した。しかし、自主練習不足の学生が目立ち、再試験を実施して初めて技術修得への姿勢に気付く学生もいた。生活援助実習では、3病院で2クールに分け領域の教員と非常勤実習指導者6人で実施した。前半開始直前にCOVID-19感染症発症のため実習施設から学生数の変更を求められたが、他施設の協力を得て予定通り実施できた。後半の実習3日目で病院での実習が困難となり、学内で代替実習をした学生が1人いた。この学生については、対人関係成立が難しく今後も継続して指導する必要がある。看護理論は、土田幸子教授が担当し、11人の理論家が「人間」「環境」「健康」

「看護」をどのように捉えているのかをグループワークし、その成果を発表し、意見交換を行い学修内容の共有を図った。

(2) 講義・演習について (2年生)

療養援助技術論は、診療の補助業務として必要な検査・治療に伴う援助技術の習得に焦点を当てた。吸入療法、経管栄養法、注射法、静脈血採血法、吸引法、罨法等を講義と演習で教授した。演習は、学年を2つに分け3人グループとし、きめ細やかな指導ができるよう領域の教員4人と非常勤指導者2人で2グループ程度を担当し実施した。演習前には課題を提示し、演習開始直後にグループ内で課題の内容とその日の展開についての打合せを行ってから開始するようにした。終了前には、グループ内で演習の振り返りを行い、自己評価につなげられるようにした。

新カリキュラムでの療養援助実習は全体を2クールに分け、前半3病院、後半4病院で領域の教員と他領域助教1人、非常勤実習指導者5人で実施した。この学年は臨地での実習が初回であったため、療養援助技術論の学外授業として半日を病院見学を実施してから臨地実習に臨んだ。初めての病院で初めて患者を受持つという緊張感で、実習場や受持ち患者との関係を形成するのに時間を要したが、初めて患者への看護を行い、患者への安全を考慮して看護実践するために緊張感をもって実施する大切さも実感できていた。本年度は旧カリキュラムの学生が2人おり、療養援助実習Ⅱの代替として後半グループで2単位分を実施した。また、1人が濃厚接触者となり配属病院での受入れも困難となり学内での代替実習となった。

(3) 統合科目 (4年生) : 看護管理論、卒業研究ゼミナール (8人)、総合実習 (15人)

看護管理論を伊藤收教授が担当し、看護管理の概論、看護管理の発展過程を歴史的観点から考察し、看護専門職としてのキャリア発達の重要性を教授した。卒業研究ゼミナールでは、新人看護師のリアリティショックの乗り越え方、マスク越しのコミュニケーションのあり方、臨地実習における看護学生の自己効力感について、手指衛生状況の実態調査等、コロナ禍を反映したテーマが目立った。担当した学生全員が研究計画書を作成し、発表会で発表し意見交換ができた。本年度は看護研究方法論の授業の一環として、3年生の参加があった。後期の総合実習では、各自の目標を基に6病院に分かれ、それぞれの病院の特性を踏まえた実習ができた。①複数患者の受持ちの看護、②夜間帯実習、③チームリーダー看護師の同行実習、④多職種カンファレンスへの参加を全員が体験することができた。全ての実習病院で学生の受入れはよく、卒業後を見据えた基礎的な技術修得に向けた取組みを実習指導者の下、実施することができ、病棟スタッフからとても良い評価を得られた。

3. 基礎看護学領域における研究に関する内容と評価

領域として研究の取組みはできなかったが、授業を振り返り、学生の生活習慣や実習病院における看護の提供内容の実態を把握し、国家試験出題基準等とも照合して、基礎看護学領域で必要な援助技術を見直していきたい。

以上

令和 5 (2023) 年度 成人看護学領域活動報告

1. 領域構成

三浦靖彦（教授）、石井真紀子（准教授）、佐藤大介（助教）、添田咲美（助教）、窓岩由実（助教）（10月～）、吉岡智大（助教）

2. 成人看護学領域における教育に関する内容と評価

1) 基礎科目・専門基礎科目

三浦靖彦教授は「形態機能学Ⅱ（生理学）」「疾病治療論Ⅰ（内科学）」「病態生理学」「臨床薬理学」を、石井真紀子准教授は「基礎ゼミナール」「生涯発達論」を担当した。

2) 専門科目

「成人看護学概論」「成人看護援助論」「がん看護論」「ケア・スピリット論Ⅱ」を石井真紀子准教授が担当した。共同で担当した前期の「慢性期看護技術論（3年生）」と「慢性期看護論（2年生）」、後期の「急性期看護技術論（3年生）」と「急性期看護論（2年生）」はそれぞれ並行して組み立てられていたことから教員の負担が大きかったが、授業評価アンケートの結果は好評であった。

成人看護学実習Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）は、COVID-19が5類に移行し前年度までの制限は緩和されたが、感染対策は引続き徹底しながら臨んだ。1年生の早期体験実習では2施設を担当し、入学して間もない学生の動機づけになるよう指導した。

3) 統合科目

三浦靖彦教授が「保健医療福祉連携論」を、石井真紀子准教授が「看護教育論」「エンドオブライフケア論」を担当した。総合実習は14人の学生が希望するテーマに沿って慢性期看護、急性期看護、手術看護、緩和ケアの分野で実習を行った。個人差はみられたがそれぞれが4年間の集大成に相応しい学修成果を挙げていた。卒業研究ゼミナールでは、10人の学生が関心のある内容について文献検討を行い、研究テーマを設定して研究計画書を作成した。11月には研究計画発表会の場で成果を発表した。

4) 大学院

三浦靖彦教授が「多職種連携特論」「看護研究方法特論」を、石井真紀子准教授が「看護学教育特論」「臨床倫理特論」を担当した。

3. 成人看護学領域における研究に関する内容と評価

前年度に採択された学内プロジェクト研究「看護学生の実習期間中におけるストレスの実態調査」の成果を示説発表した（添田咲美, 吉岡智大, 大井慈郎, 佐藤大介, 石井真紀子. 2022. 看護学生の実習期間中におけるウェラブル心拍計を用いたストレスの実態調査. 第16回岩手看護学会学術集会. 滝沢市.）。

三浦靖彦教授は、臨床倫理やアドバンス・ケア・プランニングをテーマとした研究成果を著書、論文にまとめ、学会で成果を発表した。

以上

令和5(2023)年度 老年看護学領域活動報告

1. 領域構成

吹田夕起子(教授)、齋藤史枝(講師)、新沼伸子(助教)、赤石美幸(助手)

2. 老年看護学領域における教育に関する内容と評価

1) 老年看護学領域科目

1年後期「老年看護学概論」では、授業内容の工夫点として、心理的な介入方法としてのレミニッセンス(回想法)を用いて高齢者へのインタビューを行い、学生の高齢者と看護に対する興味を育んだ。2年前期「老年看護援助論」では、高齢者疑似体験やヘルスプロモーション演習として患者が実践できる退院パンフレットの作成を取入れる工夫を行った。2年後期「老年看護技術論」では、高齢者の残存機能を活かした生活援助技術やヘルスアセスメント技術の演習(事前・事後学習含む)、看護過程演習を通して高齢者の看護実践に即した方法が修得できるよう工夫を行った。いずれの授業も学生の取り組みの姿勢及び達成度とも良好であった。4年生の「卒業研究ゼミナール」では、9人の学生の研究計画書作成と発表に向けて指導を行い、学生の満足度も高かった。

「老年看護学実習」は3年前期・後期に実施したが、全員が臨地での実習を行うことができた。感染症等で出席日数が不足した学生には追実習を行った。学生の実習に対する満足度は高く、実習施設からの評価も高かった。4年後期の「総合実習」では、11人が自己の学習課題・目標を設定して病院実習を行った。実習目標の達成度及び実習施設からの評価も高かった。

2) 基礎科目、専門基礎科目、その他の臨地実習

1年通年「基礎ゼミナール」1年前期「早期体験実習」1年後期「生涯発達論」2年前期「療養援助実習」を領域教員が担当した。「基礎ゼミナール」ではLGBTに関するアンケート調査を行い、学修成果を発表した。実習に関しては、学内及び実習施設との調整を行うと共に実習指導の要として機能した。ほとんどの学生の取り組みの姿勢はよく、学生の達成度は高かった。

3. 老年看護学領域における研究に関する内容と評価

学内共同研究(筆頭者:齋藤史枝講師)として「介護老人福祉施設職員における急変時の感染対策を含めた対応の実態とシミュレーショントレーニングのニーズ」に取り組み、3月の学内研究報告会で成果を発表した。

齋藤史枝講師は、科学研究費助成事業の外部資金を受け、基盤研究(C)「介護老人保健施設での感染対策を融合した出前型急変時対応シミュレーション研修の開発」に取組んだ。更に「エンゼルケア(死後処置)の実践に関する文献検討ー領域別の実践に焦点をあててー」について、日本エンドオブライフケア学会第6回学術集会で発表した。新沼伸子助教は「入院高齢者慢性疾患患者の看護師のアドバンス・ケア・プランニングー支援のタイミング及び支援内容ー」について、第43回日本看護科学学会学術集会で発表を行い、

論文投稿に向けて準備を行った。赤石美幸助手は、大学院（修士課程）に在籍し、修士論文研究計画書作成に取り組んだ。吹田夕起子教授は、書籍（共著）の原稿作成、論文投稿（共著）に向けて準備を行った。

各教員がそれぞれの研究に取り組んでいるが、引続き領域内で協力しつつ研究成果を上げられるよう取り組む必要がある。

以上

令和 5 (2023) 年度 母性看護学領域活動報告

1. 領域構成

江守陽子（教授）、大谷良子（准教授）、佐藤恵（講師）

2. 母性看護学領域における教育に関する内容と評価

母性看護学領域が主担当となる科目として、新カリキュラムによる 1 年生の「母性看護学概論」（江守陽子）、2 年生の「母性看護援助論」（江守陽子・大谷良子・佐藤恵）、「母性看護技術論」（江守陽子・大谷良子・佐藤恵）、従来カリキュラムによる 3 年生の「母性看護援助論」（江守陽子・大谷良子・佐藤恵）、「母性看護技術論」（江守陽子・大谷良子・佐藤恵）、「母性看護学実習」（江守陽子・大谷良子・佐藤恵）、「セクシャルヘルス・アセスメント（選択科目）」（江守）、4 年生の「総合実習（母性看護学領域）」（江守陽子・大谷良子・佐藤恵）、「卒業研究ゼミナール」（江守陽子・大谷良子・佐藤恵）を開講した。

講義・演習・実習共に基本的な母性看護学の知識・技術の着実な習得を目指し、学生が興味を持って自ら学ぶ意欲を高められるような教授法を日々工夫している。残念ながら、成績の良くなかった学生には再試験をし、再学習の機会を与え、それでも成績不振の学生には、個別に課題を与え、単元の確実な習得を促している。

本年度は、コロナ感染症は 5 類扱いとなったものの、母性看護学の領域別実習では、本人及び家族のコロナ感染、インフルエンザ感染、感染性胃腸炎等により実習を欠席し、自宅学習に振替えた学生が数人存在した。

母性看護学領域の教員は 3 人のみであるが、実習施設が遠方であることや実習場所が複数個所に分かれて実習していることから、本年度は延べ 2 人の非常勤実習助手の支援を得て行った。新カリキュラムの 2 年生「母性看護援助論」と「母性看護技術論」、従来カリキュラムの 3 年生「母性看護援助論」と「母性看護技術論」が、重複して本年度中に講義をすることとなったことから、非常勤実習助手の支援は有用であった。

3. 母性看護学領域における研究に関する内容と評価

佐藤恵講師、大谷良子准教授、江守陽子教授の「提供卵子を用いた体外受精-胚移植により出産した女性の経験」が、日本生殖看護学会誌 20(1)に掲載された。

更に、佐藤恵講師、大谷良子准教授、江守陽子教授の英語論文「Childbirth Experience of Women who Gave Birth during the COVID-19 Pandemic in the Tohoku Region of Japan: An Internet-based Questionnaire Survey.」が、*Asian Journal of Pregnancy and Childbirth*, 6(1)に掲載された。

本年 3 月には佐藤恵講師、大谷良子准教授、江守陽子教授の、「Experiences of women giving birth during coronavirus disease pandemic in Japan: an internet-based survey」について、The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS)、東京大会でポスター発表を行った。

今後も母性看護学領域として、微力ながらも社会に貢献できるような教育、研究成果を発出していきたい。

以上

令和 5 (2023) 年度 小児看護学領域活動報告

1. 領域構成

濱中喜代（教授）、下野純平（准教授）、秋本和宏（助教）、遠藤麻子（助教）

2. 小児看護学領域における教育に関する内容と評価

濱中喜代教授は、関連科目の「生涯発達論」を科目責任者として担当した。例年同様に発達理論、小児の発達段階、各期の特徴について概説した。その学びを踏まえて、1年後期に「小児看護学概論」を展開し、小児看護学の在り方について教授した。他に「ケア・スピリット論Ⅱ」を担当した。また、3年前期の「エンドオブライフケア論」を担当した。更に、4年前期に「看護教育論」を、後期には清水哲郎教授と「臨床倫理」を担当し、倫理的ジレンマ、ケア・スピリット等について実習体験の振り返りを基に展開し成果を得た。

下野純平准教授は、科目責任者として新カリキュラム2年前期の「小児看護援助論」を担当し、小児の看護援助方法及び看護過程について教授した。また、旧カリキュラム3年前期、新カリキュラム2年後期の「小児看護技術論」では実習前に必要な技術について、演習中心に秋本和宏助教、遠藤麻子助教と共に展開した。後期の「家族看護論」は科目責任者として家族看護学の基礎について教授した。卒研ゼミナールにおいては、5人の学生を指導し、確実な成果を得た。また、本年から新たに岩手県立療育センターの実習が加わった3年通年の「小児看護学実習」を科目責任者として担当し、保育施設では前年から4施設で、病院では県立病院等3施設で行った。前年度と異なり全面的な学内代替実習は回避され、実習目標はほぼ達成された。更に、4年後期の「総合実習」を小児看護学の統括として担当し、2クリニック、2病院、1保育施設で実習ができた。感染症の発症等で学生の数人が学内代替実習になったほかは施設での実習ができた。

秋本和宏助教、遠藤麻子助教は卒研ゼミナールにおいて、濱中喜代教授の指導の下、1人ずつ学生を担当し指導することができた。

大学院では、濱中喜代教授は「看護教育学特論」「看護理論特論」「臨床倫理特論」を担当した。看護学特別研究の担当学生はいなかった。下野准教授は、修士論文審査委員の主査を務めた。今後も学部教育、大学院教育に尽力していきたい。

3. 小児看護学領域における研究に関する内容と評価

下野純平准教授は科学研究費の助成を受け「早産児の両親を支援するフォローアップ外来における看護援助開発に向けた基礎的研究（課題番号：21K17389）」（研究代表者）に引続き取り組んでおり、その成果を日本小児看護学会第33回学術集会において示説発表した。更に、日本小児看護学会誌に、下野純平准教授、濱中喜代教授連名で投稿し、資料として受理されている。遠藤麻子助教は、大学院の修士論文「療養生活を継続している学童期の医療的ケア児と家族に対する訪問看護師の支援の現状とその課題」をまとめ、日本小児看護学会第33回学術集会において口頭発表後、同学会誌に遠藤麻子助教、濱中喜代教授と連名で投稿し、資料として受理されている。

次年度以降も小児看護学領域として、研究活動を充実させて、社会に貢献していきたい。

以上

令和 5 (2023) 年度 精神看護学領域活動報告

1. 領域構成

岡田実（教授）、佐藤つかさ（助教）、木元司（助手）（9月～）

2. 精神看護学領域における教育に関する内容と評価

精神看護学領域の講義は当初の予定通り終了した。新型コロナウイルスの 5 類移行の年を迎えたが、総合実習及び領域別実習共に、実習生の感染及び実習施設病棟での感染拡大に伴い、一部で実習中止を余儀なくされ学内実習に振替えた。

振替実習となった学生には学修上の不利益にならないよう、既に収集している患者情報に基づいて看護計画策定とその根拠を深める演習を行った。このような工夫により学生の不利益を最小限にとどめることができた。また、一覧性を重視した書式に改訂した看護過程用紙の書式を運用し、概ね、実習生の満足が得られた。実習施設より看護研究支援の依頼があり、これに対応した。

3. 精神看護学領域における研究に関する内容と評価

精神看護学領域では、2020 年度の学内共同研究に採択された『岩手県沿岸部にある医療機関と看護系大学の新たな連携の構築—ICT を活用した看護支援プログラムのニーズ調査』の結果に基づいて、2021 年度以後、県内沿岸部の医療機関 K 病院を対象に、看護研究支援（2021 年度）、看護師長コンサルテーション（前年度）、副看護師長コンサルテーション（本年度 9 回：5/31、7/12、8/22、9/13、10/27、12/27、1/25、2/27、3/15（16:00～17:00）：副看護部長・副看護師長 6 人・看護研究 5 題）を 3 年間継続してきた。

本年度、新たに沿岸部の M 病院を対象に看護研究支援（11 回：6/16、7/19、8/25、9/19、10/20、11/27、12/22、1/17、2/19、3/15、3/18：教育専従師長・看護研究指導担当 1 人・看護師 5 人・看護研究 5 題）を開始した。

更に、本学の「地域貢献事業企画」として本年度から新たに『精神科中堅看護師のためのリスキリング・プログラム』を開始し、県内 2・県外 1 精神科病院、県外 1 大学精神看護学領域から 1 人ずつ計 4 人の参加（各医療機関看護部長推薦及び領域教授推薦）で（第 1 期シリーズ：10/27、11/28、12/25、1/24、2/21、3/19、年間 8 回開催プログラムのうち本年度 6 回実施済み、18:00～19:30）を始めた。

今後も、一般科や精神科の臨床現場における看護の質向上に貢献する活動を展開する。

以上

令和 5 (2023) 年度 公衆衛生看護学領域活動報告

1. 領域構成

鈴木るり子（教授）、大友美恵（講師）、石田知世（助教）、磯島実奈（助手）

2. 公衆衛生看護学領域における教育に関する内容と評価

「ヘルスプロモーション論（新・旧カリキュラム）」「地域看護学概論」「地域看護援助論」「公衆衛生看護技術論」「公衆衛生看護管理論」を開講した。加えて、「地域・在宅看護論」を一部担当した。本年度から、講義担当者が 3 人になり、講義のグループワークの進行や演習の指導等を円滑に行うことが出来た。また、4 年生 7 人を対象として卒業研究ゼミナールを指導し、全員が卒業研究計画書を完成させた。

「地域看護学実習」は、4 年前期に全学生を対象に実施した。学生の評価は、平均 3.9/4 であった。地域事例のアセスメントの過程を通して、健康課題の抽出を捉え、看護職が地域アセスメントを実施する必要性について学びを深めた。次年度の課題として、実習アンケートにおいて、看護師課程の学生にとって実習の必要性を感じられないといった記述もあったため、実習内容等について検討が必要である。

また、保健師課程を選考した 20 人の学生を対象に 3 つの実習を実施した。「公衆衛生看護学実習」では保健所実習 6 か所、市町村実習 10 か所、学校実習 10 か所、産業実習 3 か所で実施した。「個人・家族・集団・組織の支援実習」では、2 人一組で 1 家族を担当し、2 回の家庭訪問実習を実施した。「公衆衛生看護管理論実習」では、中川町町内会の住民の方々を対象に、地域アセスメントから健康課題の抽出、改善のための活動計画を PDCA cycle を基に展開した。実習の総合的な満足評価は 4/4（回答率 50%）と高かった。

「総合実習」は、6 人がそれぞれ学修課題を明確化し積極的に取り組み、指導者からも高い評価を得た。実習の総合的な満足評価は 4/4（回答率 50%）と満足度は高かった。

3. 公衆衛生看護学領域における研究に関する内容と評価

公衆衛生看護学領域では、それぞれの研究テーマで取り組んできた。鈴木るり子教授は「東日本大震災被災地域の高齢者における住居形態と住環境リスクに関する観察研究：the RIAS Study」が日本公衆衛生雑誌に原著論文として掲載された。現在もデータ分析中であり、今後も投稿論文作成予定である。前年度からは、基盤研究（C）（分担）「被災回復期における虚弱の増悪・緩衝要因の解明と、地域特性に応じた虚弱予防の実践」に取り組んでいる。本年度からは、若手研究（協力員）「仮設住宅での居住期間が災害後のうつ病の発症と寛解に及ぼす長期的影響」の検討に取り組んでいる。大友美恵講師は、前年度から基盤研究（B）（分担）「在宅高齢者の介護予防における「連想法」の国際的方法の確立と効果の検証」に取り組んでいる。石田知世助教は、修士論文を基に今後、論文投稿や学会発表をする予定である。磯島実奈助手は、2024 年 3 月に「修士（看護学）」（岩手保健医療大学大学院）を取得し、修士論文「市町村保健師と住民組織の協働が地域保健福祉政策に与える影響—保健師の施策化・事業化に焦点をあてて—」の投稿論文を作成し、3 月に学内研究報告会で発表した。

以上

令和 5 (2023) 年度 在宅看護学領域活動報告

1. 領域構成

大沼由香（教授）、越納美和（准教授）、加藤美幸（助教）、太田ゆきの（助教）

2. 在宅看護学領域における教育に関する内容と評価

1 年生の「基礎ゼミナール」（大沼由香）、在宅看護学領域に関する科目としては、2 年生の「地域・在宅看護学概論」（大沼由香・越納美和）、3 年生の「在宅看護援助論」（大沼由香・越納美和・加藤美幸・太田ゆきの）、保健医療福祉連携論（大沼由香・越納美和・加藤美幸・太田ゆきの）を担当した。また、4 年生の「在宅看護技術論」・「在宅看護学実習」（大沼由香・越納美和・加藤美幸・太田ゆきの）を担当した。更に「総合実習（在宅看護学領域）（学生 8 人）」（大沼由香・越納美和・加藤美幸・太田ゆきの）、「卒業研究ゼミナール（学生 14 人）」（大沼由香・越納美和・加藤美幸・太田ゆきの）を開講した。

教育に関する学生からの授業評価は高評価で、教員の熱意を感じていた。自由記載では「実習につながる授業展開がわかりやすい」「訪問マナーも学べたのがよい」「在宅看護過程の展開方法がわかりやすい」など、好意的、肯定的であった。在宅看護学実習の授業評価は全体として高評価で「事前に目標を明確にして実習に臨むことができた」「多様な事例の訪問ができた」「学内実習が充実していた」などの自由記載が多かった。

一方、1 年生のアドバイザーを加藤美幸助教が担当し、2 年生のアドバイザーを大沼由香教授と太田ゆきの助教が担当して、看護専門基礎科目の学修や学生生活について定期面談を行い、学生生活全般の相談を受けると共に状況把握に努めた。越納美和准教授は、3 年の担任として学習や実習、キャリア支援の指導を行った。また、委員会活動として、大沼由香教授は、学長補佐、教学委員会副委員長、研究委員会委員長、地域貢献・国際交流委員会委員長、研究倫理審査委員会副委員長を担当し、越納美和准教授は、学生委員会、入試委員会、研究委員会、学生キャリア支援室副室長、ハラスメント防止対策委員会相談員を担当した。加藤美幸助教は、国家試験対策支援委員会と実習委員会、太田ゆきの助教は、FD 委員会と地域貢献・国際交流委員会に所属して大学運営に貢献し、学生の教育成果に間接的に貢献した。

3. 在宅看護学領域における研究に関する内容と評価

大沼由香教授は、研究代表者として前年度までの科学研究費補助金助成事業「地域包括支援センターが行う住民主体の介護予防活動の創出支援システムの開発」研究報告書を作成した。また、本年度から新たに採択された科学研究費補助金助成事業「看護のリスクリングを促進する多職種連携基盤型事例検討法の開発」を研究倫理審査で承認をうけ調査活動を開始している。

大沼由香教授は、分担研究者として 2019 年度科学研究費（研究代表者赤間由美）の「生活保護現業員と保健師の協働による自己効力感向上を目指したケース会議の検証」に参加し、大沼由香教授が開発した「わかる事例検討会」の運営方法を用いて検証に協力している。大沼由香教授は「看護系大学基礎教育における伝統医療倫理教育の展望—日本と台湾での看護教育経験者の語りの SCAT 分析—」の筆頭著書、その他 4 題の論文を発表した。

越納美和准教授は「終末期在宅療養者を看取った家族の思いとその看護支援方法」と「地域・在宅看護師と助産師の連携による被虐待児の家族支援の検討」の2題の筆頭著書、共同著書1題の計3題の論文を発表した。太田ゆきの助教は「帯状疱疹後神経痛患者の痛みと日常生活への影響—患者の語りから—」を筆頭著者として発表した。大沼由香教授・太田ゆきの助教が5つの演題を学会発表し、加藤美幸助教は「訪問看護師が行う在宅褥瘡ケアの構造」について日本在宅ケア学会で発表した。

また、学内共同研究として、研究代表者越納美和准教授、共同研究者大沼由香教授・太田ゆきの助教による「社会的孤立状態にある買い物弱者支援の現状と課題—新型コロナウイルス感染症流行後の地域力を生かすケアマネジメントの検討—」に取組んだ。なお、越納美和准教授は、博士課程に在籍し博士論文作成中である。更に、介護予防の出前講座を大沼由香教授・太田ゆきの助教で1回実施し、在宅における排泄ケアの出前講座を加藤美幸助教が1回を担当した。領域としては、計2回の出前講座を担当して専門的知見を地域に還元した。在宅看護学領域全体で研究への積極的な取組みを行っており、次年度も引続き、在宅ケア力の向上・啓発に貢献していく。

以上

令和 5 (2023) 年度 大学院 共通科目活動報告

1. 教員構成

岡田実(教授)、濱中喜代(教授)、江守陽子(教授)、清水哲郎(教授)、鈴木るり子(教授)、大沼由香(教授)、伊藤收(教授)、三浦靖彦(教授)、下野純平(准教授)、大井慈郎(准教授)、石井真紀子(准教授)、上田耕介(講師)

2. 大学院共通科目における教育に関する内容と評価

【看護理論特論】岡田実、濱中喜代

選択科目：受講者 3 人。受講者それぞれの修士論文に深く関連した理論、概念、重要文献に関して、修論テーマに基づいてスライド 4・5 枚程度のプレゼンテーションを毎回全員が行い、それらに関するディスカッションを行った。曖昧な概念をより厳密にすること、及び相互の意見交換を通じて自身の理解している部分と理解できていない部分に気づくこと、また、効果的なプレゼンテーション・スキルに熟練することも意図した。大理論については F. ナイチンゲールと A. ウィーデンバックを扱った。

【看護研究方法特論 I】岡田実、江守陽子

必修科目：受講者 4 人。2 年間で取組まれる修士論文の作成過程について、具体的な作業スケジュールを提示し理解を促した。また、修士論文の作成に求められる科学的な研究プロセス(研究デザイン、研究方法、倫理的配慮、文献検索法)を知り、研究課題、研究背景、研究疑問、文献検討、概念枠組み等の理解を進めながら、研究計画書作成に必要な基礎的な知識の修得を促した。

【看護研究方法特論 II】岡田実、鈴木るり子、伊藤收

必修科目：受講者 4 人。研究倫理審査会に申請する研究計画書を作成するために具体的な作業を進めた。研究背景、研究目的と意義、研究方法、研究対象の選定方法及び除外基準、データ収集の方法及び分析方法、研究協力依頼文、質問紙やインタビューガイドの作成、倫理的配慮事項等を考慮しながら、研究計画書を研究倫理審査委員会に申請し、承認に至るまで加筆修正により研究計画書の完成度を高める作業を行った。

鈴木担当分の履修生 2 人は、地域看護学特論 I・II、地域看護学演習 I・II で明確化された研究課題に対して、看護研究方法特論 II で研究計画書を作成し、研究倫理審査申請書の作成に取組み 12 月に申請した。研究倫理審査結果は承認され、次年度の看護学特別研究では、調査の実施からスタートできることになった。

【臨床倫理特論】清水哲郎、濱中喜代、石井真紀子

履修者は 4 人であった。授業においては、社会にある倫理、医療・ケア従事者が医療・ケアを実践する際の臨床倫理、看護における倫理的な諸概念、事例検討のツール(臨床倫理検討シート 3 種)等に関する講義、履修者による臨床で遭遇した事例の報告とそれに関する話合い、また、カンファレンス用ワークシートによる共同検討、臨床倫理能力を発展させる方法等についての講義・演習等を行った。事例の共同検討は、臨床の振返

りとして有意義であった。

【多職種連携特論】 大沼由香、三浦靖彦

「多職種連携特論」は、後期に開講し、三浦靖彦教授と大沼由香教授が担当した。本講義では、多職種連携の我が国の現状と先進事例紹介後、学生らの臨床での経験や課題をディスカッションし、アクティブラーニング型授業を展開した。

また、事例検討を実施し、臨床の生事例を用いて、倫理的課題の検討や多職種連携における対象者理解の方法を考察した。受講生4人は単位を取得している。

【統計学特論】 大井慈郎

本授業は、統計学の研究手法について、データの収集方法から多変量解析の基礎までを幅広く扱った。全15回中5回目以降は、実際に統計ソフトを用い、1人1人がデータセットを操作しながら、分析の意味や結果の読み方、論文執筆の際の表記方法を学習した。受講生はそれまでの経歴から数学や統計に関する知識に差があったが、少人数教育である強みを活かし、理解度を確認しつつ授業を進行することができた。

【質的研究方法特論】 大井慈郎、岡田実

本授業では、質的調査の研究手法について、その概要と長所・短所を理解することを目的とした。4回を質的調査の概略的理解、6回をインタビュー調査の技法、5回を様々な質的調査法の概要理解という構成で授業を実施した。実際の学術書・論文を読解しながらそれぞれの調査法を用いたことのメリット・デメリットを受講生と議論しながら進める形をとり、これから修士論文を執筆する際に検討すべきポイントを確認しながら進行することができた。

【フィジカルアセスメント特論】 担当なし

開講なし。

【医療社会学特論】 上田耕介

開講なし。

【コンサルテーション特論】 岡田実

選択科目：受講者2人。Edgar. H. Scheinによる2文献「プロセス・コンサルテーション」「問いかける技術」を通じて、対人援助関係を通じて展開されるコンサルテーションの基本を押さえながら、受講者の職場における「コンサルテーション」機能を想起し、望ましいコンサルテーションが職場組織の中でどのように展開すべきかについて考察を促した。また「替えのきかない人材になるための専門性の身につけ方（国分峰樹著）」を抄読しながら、AI時代において医療職に残される専門性についてディスカッションした。

【災害看護特論】 鈴木るり子

開講なし。

【看護学教育特論】 江守陽子、濱中喜代、土田幸子、石井真紀子

基礎・地域連携看護学領域 2 人、看護管理学領域 2 人の計 4 人の学生の受講があった。講義内容は、看護職における看護基礎教育と継続教育の現状と課題について理解を深め、看護職への教育のあり方について探究するものである。

具体的には、我が国の看護教育制度の特徴、看護教育カリキュラムの変遷と課題、生涯教育の観点から成人学習に関する教育理論、看護継続教育における教育プログラムの作成・教材開発・評価等について講義した。

以上

令和5(2023)年度 大学院 基礎・地域連携看護学領域活動報告

1. 領域構成

鈴木るり子(教授)、大沼由香(教授)、石井真紀子(准教授)

2. 基礎・地域連携看護学領域における教育に関する内容

【基礎看護学特論Ⅰ】

開講なし。

【基礎看護学特論Ⅱ】

開講なし。

【基礎看護学演習Ⅰ】

開講なし。

【基礎看護学演習Ⅱ】

開講なし。

【地域看護学特論Ⅰ】鈴木るり子

本科目では、地域看護学に関連のある看護課題の中で、健康の社会的決定要因について講義した。また、コンパッション都市—公衆衛生と終末期ケアの融合—(アラン・ケレハ)の文献を基に、公衆衛生・公衆衛生看護活動について討議した。国内外の健康政策、我が国における新たな地域生活者に必要な保健・福祉・医療制度について討議した。到達目標についてはほぼ達成したと評価する。

【地域看護学特論Ⅱ】鈴木るり子

地域ケアシステム構築に関する概念や理論について整理し、理解を深めた。更に、健康格差の文献を中心に国内外の健康格差について批判的に捉え、今後の我が国の高齢化、人口減少の推移を分析しながら必要とされる、新たな諸制度について討議した。到達目標についてはほぼ達成したと評価する。

【地域看護学演習Ⅰ】鈴木るり子

履修生の興味ある地域看護学に関連のある看護2題及び健康課題について、国内外の文献を収集し、批判的な分析を加え地域看護学領域研究の基礎能力が養われることを目指した。本科目では、文献クリティークの方法を修得し、適切な文献検討をする能力が得られたと評価する。

【地域看護学演習Ⅱ】鈴木るり子

2人の履修生は、研究テーマの確定、研究の意義、研究対象、研究デザイン、研究計画の手順を検討し、研究計画書を作成した。更に、12月の研究倫理審査申請を目指し、

研究倫理審査申請書を作成した。2人の履修生は、それぞれ1月と3月に研究倫理審査の承認を受けた。到達目標については、ほぼ達成したと評価する。

【在宅看護学特論Ⅰ】大沼由香
開講なし。

【在宅看護学特論Ⅱ】大沼由香
開講なし。

【在宅看護学演習Ⅰ】大沼由香
開講なし。

【在宅看護学演習Ⅱ】大沼由香
開講なし。

以上

令和5(2023)年度 大学院 臨床・応用看護学領域活動報告

1. 領域構成

江守陽子(教授)、濱中喜代(教授)、岡田実(教授)、下野純平(准教授)、大谷良子(准教授)、佐藤恵(講師)、川添郁夫(非常勤)

2. 臨床・応用看護学領域における教育に関する内容

【老年看護学特論Ⅰ】

開講なし。

【老年看護学特論Ⅱ】

開講なし。

【老年看護学演習Ⅰ】

開講なし。

【老年看護学演習Ⅱ】

開講なし。

【母性看護学特論Ⅰ】 江守陽子

開講なし。

【母性看護学特論Ⅱ】 江守陽子

開講なし。

【母性看護学演習Ⅰ】 江守陽子、大谷良子、佐藤恵

開講なし。

【母性看護学演習Ⅱ】 江守陽子、大谷良子、佐藤恵

開講なし。

【小児看護学特論Ⅰ】 濱中喜代、下野純平

開講なし。

【小児看護学特論Ⅱ】 濱中喜代、下野純平

開講なし。

【小児看護学演習Ⅰ】 濱中喜代、下野純平

開講なし。

【小児看護学演習Ⅱ】濱中喜代、下野純平
開講なし。

【精神看護学特論Ⅰ】岡田実
開講なし。

【精神看護学特論Ⅱ】岡田実
開講なし。

【精神看護学演習Ⅰ】岡田実
開講なし。

【精神看護学演習Ⅱ】岡田実、川添郁夫
開講なし。

以上

令和5(2023)年度 大学院 看護管理学領域活動報告

1. 領域構成

伊藤收(教授)、土田幸子(教授)、高橋明美(非常勤講師)

2. 大学院看護管理学領域における教育に関する内容と評価

本年度は1年生が2人、2年生が1人在籍した。なお、2年生は体調を崩し、急遽「長期履修」に変更した。また、本年度より本領域の修了生(1期生)で、前岩手県立中央病院看護部長の高橋明美氏を「看護管理学演習」の非常勤講師に迎えた。

【看護管理学特論Ⅰ】伊藤收

履修生：2人

本科目は「認定看護管理者教育課程：ファーストレベル」に相当する科目である。この科目は看護師長経験者向けの内容になっているが、履修生の内の1人が主任在職中で、もう1人は特別養護老人ホームの業務部長在職中と、2人共に医療機関での看護師長経験のない履修生のためこれまでにない内容の工夫が必要となった。

【看護管理学特論Ⅱ】伊藤收

履修生：2人

本科目は「認定看護管理者教育課程：セカンドレベル」に相当する科目である。上記の「看護管理学特論Ⅰ」の学修をふまえて、看護部長職を支える次長職(副部長)が担う「人事管理・業務管理」に加え実習調整、院内教育等を主な学修内容として教授した。

【看護管理学特論Ⅲ】伊藤收

履修生：2人

本科目は「認定看護管理者教育課程：サードレベル」に相当する科目である。前記の「看護管理学特論Ⅰ・Ⅱ」の学修をふまえて、看護部長職(副院長職)に必要とされる「目標管理・人事考課・経営参画」等に加え、本年度は岩手県看護協会との協働についても教授した。

【看護管理学演習】伊藤收、土田幸子、高橋明美

本科目は「認定看護管理者」の資格取得に向け、特に「組織改善計画」の策定等に重点を置き、履修生の考える「改善計画」策定については、非常勤講師の高橋氏から具体的で多岐にわたる示唆が得られ、学修を深めることができた。

以上

令和5(2023)年度 大学院 研究科目活動報告

1. 教員構成

岡田実(教授)、濱中喜代(教授)、清水哲郎(教授)、江守陽子(教授)、鈴木るり子(教授)、土田幸子(教授)、大沼由香(教授)、吹田夕起子(教授)、伊藤收(教授)、三浦靖彦(教授)、石井真紀子(准教授)、下野純平(准教授)、大谷良子(准教授)、大井慈郎(准教授)、佐藤恵(講師)

2. 大学院研究科目における教育に関する内容

【看護学特別研究・地域看護学分野】鈴木るり子、吹田夕起子、大井慈郎

履修生2人は、1年次に研究倫理審査の承認を得た研究計画書に基づき、看護学特別研究では、主指導を鈴木るり子教授が、副指導を吹田夕起子教授・大井慈郎准教授が担当し指導を行った。調査の実施、分析、結果、考察について論文作成過程を指導した。最終的には修士論文を完成させることができた。

以上

令和 5 (2023) 年度 大学院 科目一覧

【共通科目】

区分	科目名称	開講時期	担当教員	開講
必修	看護研究方法特論Ⅰ	1前	岡田実、江守陽子	○
	看護研究方法特論Ⅱ	1後	岡田実、濱中喜代、清水哲郎、江守陽子、鈴木るり子、大沼由香、伊藤收、三浦靖彦、下野純平、大井慈郎	○
	臨床倫理特論	1後	清水哲郎、濱中喜代、石井真紀子	○
	多職種連携特論	1後	大沼由香、三浦靖彦	○
	看護学教育特論	1前	江守陽子、濱中喜代、土田幸子、石井真紀子	○
選択	看護理論特論	1前	岡田実、濱中喜代	○
	統計学特論	1前	大井慈郎	○
	質的研究方法論	1前	大井慈郎、岡田実	○
	フィジカルアセスメント特論	1前		
	医療社会学特論	1後	上田耕介	
	コンサルテーション特論	1後	岡田実	○
	災害看護特論	1後	鈴木るり子	

【専門科目】

領域名	科目名称	開講時期	担当教員	開講
基礎・地域連携看護学領域	基礎看護学特論Ⅰ	1前		
	基礎看護学特論Ⅱ	1後		
	基礎看護学演習Ⅰ	1前		
	基礎看護学演習Ⅱ	1後		
	地域看護学特論Ⅰ	1前	鈴木るり子	○
	地域看護学特論Ⅱ	1後	鈴木るり子	○
	地域看護学演習Ⅰ	1前	鈴木るり子	○
	地域看護学演習Ⅱ	1後	鈴木るり子	○
	在宅看護学特論Ⅰ	1前	大沼由香	
	在宅看護学特論Ⅱ	1後	大沼由香	
	在宅看護学演習Ⅰ	1前	大沼由香	
	在宅看護学演習Ⅱ	1後	大沼由香	
臨床・応用看護学領域	老年看護学特論Ⅰ	1前		
	老年看護学特論Ⅱ	1後		
	老年看護学演習Ⅰ	1前		
	老年看護学演習Ⅱ	1後		
	母性看護学特論Ⅰ	1前	江守陽子	
	母性看護学特論Ⅱ	1後	江守陽子	
	母性看護学演習Ⅰ	1前	江守陽子、大谷良子、佐藤恵	
	母性看護学演習Ⅱ	1後	江守陽子、大谷良子、佐藤恵	
	小児看護学特論Ⅰ	1前	濱中喜代、下野純平	
	小児看護学特論Ⅱ	1後	濱中喜代、下野純平	
	小児看護学演習Ⅰ	1前	濱中喜代、下野純平	
	小児看護学演習Ⅱ	1後	濱中喜代、下野純平	
	精神看護学特論Ⅰ	1前	岡田実	
	精神看護学特論Ⅱ	1後	岡田実	
精神看護学演習Ⅰ	1前	岡田実		
精神看護学演習Ⅱ	1後	岡田実、川添郁夫（非常勤）		
看護管理学領域	看護管理学特論Ⅰ	1前	伊藤收	○
	看護管理学特論Ⅱ	1前	伊藤收	○
	看護管理学特論Ⅲ	1前	伊藤收	○
	看護管理学演習	1後	伊藤收、土田幸子、高橋明美（非常勤）	○

【研究科目】

科目名称	開講時期	担当教員	開講
看護学特別研究	2通	岡田実、濱中喜代、清水哲郎、江守陽子、鈴木るり子、土田幸子、大沼由香、吹田夕起子、伊藤收、三浦靖彦、石井真紀子、下野純平、大谷良子、大井慈郎、佐藤恵	○

II 個人業績

■教授 清水 哲郎（一般教養）

【著書】

- 1) 清水哲郎. (2023). 予想と決定・均衡と相応・選択と実施—鎮静ガイドラインの背景理論—. 森田達也・田代志門(編), 鎮静と安楽死のグレーゾーンを問う—医学・看護学・生命倫理学・法学の視点—, (pp. 201-210). 中外医学社. 東京.

【論文】

- 1) 清水哲郎. (2023). 高齢者ケアの現場で《生・死》と《老い》を哲学する—臨床死生学的考察—. 老年精神医学雑誌, 34(9), 824-834.

【学会発表】

- 1) 清水哲郎. (2023, 11 月). 認知症高齢者と家族の意思決定支援—臨床倫理の視点から—(教育講演・招待). 第 41 回日本認知症学会学術集会/第 37 回日本老年精神医学会. 東京都千代田区.

■准教授 大井 慈郎（一般教養）

【学会発表】

- 1) 大井慈郎. (2023). コロナ禍にみえる「住民運営の通いの場」の活動継続の困難性—岩手県盛岡市 X 地区における高齢者支援活動終了の分析より—. 第 69 回東北社会学会大会. 宮城県.
- 2) 添田咲美, 吉岡智大, 大井慈郎, 佐藤大介, 石井真紀子. (2023). 看護学生の実習期間中におけるウェアブル心拍計を用いたストレスの実態調査, 78. 岩手県.

■講師 上田 耕介（一般教養）

【学会発表】

- 1) 上田耕介. (2023). マイケル・マンの「帝国主義」論. 第 69 回東北社会学会大会. 宮城県.

■教授 伊藤 収（基礎看護学領域）

【論文】

- 1) 佐藤奈美枝, 伊藤 収. (2023). 看護師長の承認行為獲得にむけた教育プログラムの有効性の検証. 岩手医科大学看護学部紀要, (Vol)23-32, 岩手.

【学会発表】

- 1) 佐藤奈美枝, 伊藤 収. (2023). 看護師長の承認行為獲得にむけた教育プログラムの有効性の検証. 第 43 回日本看護科学学会学術集会. 東京都.

■助教 武田恵梨子（基礎看護学領域）

【学会発表】

- 1) 武田恵梨子, 江守陽子, 大谷良子. (2023). 高校生の妊孕性知識の実態と関連要因. 第 64 回日本母性衛生学会学術集会. 大阪府.

■教授 三浦靖彦(成人看護学領域)

【著書】

- 1) 三浦靖彦. (2023, 5月). 1-3 アドバンス・ケア・プランニングとは. 松田能宣, 山口崇 (編), これからはじめる非がん患者の緩和ケア(第2版), (pp. 21-35). じほう. 東京.
- 2) 三浦靖彦. (2023, 11月). 3-9 緩和ケア. 角田亘, 岡崎史子(編), リハビリテーションテキスト内科学, (pp. 158-163). メジカルレビュー社. 東京.
- 3) 三浦靖彦. (2023, 11月). 5-9 KDQOL. 下妻晃二郎(監), 能登真一(編), 臨床・研究で活用できる! QOL 評価マニュアル, (pp. 112-120). 医学書院. 東京.

【論文】

- 1) 大武陽一, 三浦靖彦. (2023). CKM における精神・心理的苦痛、家族への対応. 日腎会誌, 65, 7, 885-890.
- 2) 三浦靖彦. (2023). イントロダクション「医療における SDGs をピアサポートとともに考える」開催報告. 生存科学, 33, 77-79.

【学会発表】

- 1) 三浦靖彦. (2023, 10月). 腎代替療法選択における倫理的側面～Conservative Kidney Management を中心に～. 第53回日本腎臓学会西部学術大会シンポジウム. 岡山県.
- 2) 三浦靖彦. (2023, 12月). アドバンス・ケア・プランニング. 日本内科学会関東支部教育講演会. 東京都.
- 3) 三浦靖彦. (2023, 9月). 研究倫理と臨床倫理. 第53回日本腎臓学会東部学術大会. 宮城県仙台市.
- 4) 千田操, 濱口明彦, 三浦靖彦ほか. (2023, 6月30日～7月1日). 緩和ケアチームが介入したがん治療前に BSC となった患者の転帰から今後の活動を考える. 第28回日本緩和医療学会学術大会. 兵庫県神戸市.
- 5) 千田操, 濱口明彦, 三浦靖彦ほか. (2023, 6月30日～7月1日). 精神疾患を有するがん患者の診断時期における意思の表明、意思決定支援～臨床倫理コンサルテーションチームと連携した2症例～. 第28回日本緩和医療学会学術大会. 兵庫県神戸市.
- 6) 三浦靖彦. (2023, 6月24日～25日). 「在宅医療・介護現場における暴力・ハラスメントに関するワーキンググループ」活動報告. 第5回日本在宅医療連合学会大会. 新潟県.
- 7) 三浦靖彦. (2023, 6月24日～25日). シンポジウム「在宅現場における倫理的問題を考える」第5回日本在宅医療連合学会大会. 新潟県.
- 8) 武ユカリ, 三木明子, 三浦靖彦. (2023, 6月24日～25日). 在宅医療・介護現場における暴力・ハラスメントの実態について～これまでの調査から. 第5回日本在宅医療連合学会大会. 新潟県.
- 9) 三浦靖彦. (2023, 6月23日). アドバンス・ケア・プランニング概論＜日本版 ACP の定義と行動基準＞から考える＞シンポジウム「現場におけるアドバンス・ケア・プランニング(ACP)の実践と課題」. 第25回日本医療マネジメント学会学術総会. 神奈川県横浜市.

- 10) 三浦靖彦, 菅沼信也, 宿野部武志, 大森泉, 堂園俊彦. (2023, 6 月 17 日). 透析疑似体験プログラムの効果に関するパイロット研究」結果について. 第 68 回日本透析医学会学術集会. 兵庫県神戸市.
- 11) 高橋理智, 宮下光令, 三浦靖彦. (2023, 5 月 26 日～28 日). 慢性維持透析をしているがん患者のオピオイド使用状況の分析. 第 16 回緩和医療薬学会学術大会. 兵庫県神戸市.
- 12) 三浦靖彦. (2023, 5 月 12-14 日). 倫理委員会企画：臨床倫理の検討方法～Jonsen の 4 分割表と臨床倫理検討シート～インタレストグループ・インタラクティブセッション. 第 14 回日本プライマリケア連合学会学術大会. 愛知県名古屋市.

■准教授 石井 真紀子(成人看護学領域)

【学会発表】

- 1) 添田咲美, 吉岡智大, 大井慈郎, 佐藤大介, 石井真紀子. (2023). 看護学生の実習期間中におけるウェアラブル心拍計を用いたストレスの実態調査. 第 16 回岩手看護学会学術集会. 岩手県滝沢市.

■助教 添田 咲美(成人看護学領域)

【学会発表】

- 1) 添田咲美, 吉岡智大, 大井慈郎, 佐藤大介, 石井真紀子. (2023). 看護学生の実習期間中におけるウェアラブル心拍計を用いたストレスの実態調査. 第 16 回岩手看護学会学術集会. 岩手県.

■講師 齋藤史枝(老年看護学領域)

【学会発表】

- 1) 齋藤史枝. (2023). エンゼルケア(死後処置)の実践に関する文献検討－領域別の実践に焦点をあてて－. 日本エンドオブライフケア学会第 6 回学術集会. 群馬県.

■助教 新沼伸子(老年看護学領域)

【学会発表】

- 1) 新沼伸子, 勝野とわ子. (2023). 入院高齢慢性疾患患者のアドバンス・ケア・プランニング－支援のタイミング及び支援内容－. 第 43 回日本看護科学学会学術集会. 山口県.

■教授 江守 陽子(母性看護学領域)

【論文】

- 1) Megumi Sato, Yoshiko Otani & Yoko Emori. (2023). Childbirth Experience of Women who Gave Birth during the COVID-19 Pandemic in the Tohoku Region of Japan: An Internet-based Questionnaire Survey. *Asian Journal of Pregnancy and Childbirth*, 6(1), 52-63.
- 2) 佐藤恵, 大谷良子, 江守陽子. (2023). 提供卵子を用いた体外受精－胚移植により出産した女性の経験. 日本生殖看護学会誌, 20(1), 17-22.

【学会発表】

- 1) Megumi Sato, Yoshiko Otani & Yoko Emori. (2023). Experiences of women giving birth during coronavirus disease pandemic in Japan: an internet-based survey. The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS). Tokyo.
- 2) 武田恵梨子, 江守陽子, 大谷良子. (2023). 高校生の妊孕性知識の実態と関連要因. 第64回日本母性衛生学会. 大阪府大阪市.

■准教授 大谷良子(母性看護学領域)

【論文】

- 1) 佐藤恵, 大谷良子, 江守陽子. (2023). 提供卵子を用いた体外受精-胚移植により出産した女性の経験. 日本生殖看護学会誌, 20(1), 17-22.

【学会発表】

- 1) 武田恵梨子, 大谷良子, 江守陽子. (2023). 高校生の妊孕性知識の実態と関連要因. 第64回日本母性衛生学会学術集会. 大阪府.
- 2) Megumi Sato, Yoshiko Otani, Yoko Emori. (2024). Users' Needs for Online Postpartum Care in the Tohoku Region of Japan. The 27th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). Hong Kong.

■講師 佐藤 恵(母性看護学領域)

【論文】

- 1) Megumi, S., Yoshiko, O., & Yoko, E. (2023). Childbirth Experience of Women who Gave Birth during the COVID-19 Pandemic in the Tohoku Region of Japan: An Internet-based Questionnaire Survey. *Asian Journal of Pregnancy and Childbirth*, 6(1), 52-63.
- 2) 佐藤恵, 大谷良子, 江守陽子. (2023). 提供卵子を用いた体外受精-胚移植により出産した女性の経験. 日本生殖看護学会誌, 20(1), 17-22.
- 3) Megumi, S. (2023). Psychometric Properties among Japanese Women Based on the Multidimensional Assessment of Women's Experience of Childbirth. *Open Journal of Nursing*, 13, 718-734.

【学会発表】

- 1) Megumi, S., Yoshiko, O., & Yoko, E. (2024). Users' Needs for Online Postpartum Care in the Tohoku Region of Japan. The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Hong Kong.

■教授 濱中喜代(小児看護学領域)

【論文】

- 1) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代. (2024). NICU退院児フォローアップ外来における看護実践の実態. 日本小児看護学会誌, 33, 79-88.
- 2) 遠藤麻子, 下野純平, 濱中喜代. (2024). 学童期の医療的ケア児と家族に対する訪問看

看護師の支援の現状とその課題. 日本小児看護学会誌, 33, 132-140.

【学会発表】

- 1) 遠藤麻子, 下野純平, 濱中喜代. (2023). 学童期の医療的ケア児と家族に対する訪問看護師の支援の現状とその課題. 日本小児看護学会第 33 回学術集会. 神奈川県横浜市.
- 2) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代. (2023). NICU 退院児フォローアップ外来における看護実践の実態: 第 2 報—看護実践に対する看護職の思いに着目して—. 日本小児看護学会第 33 回学術集会. 神奈川県横浜市.

■ 准教授 下野 純平 (小児看護学領域)

【論文】

- 1) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代. (2024). NICU 退院児フォローアップ外来における看護実践の実態. 日本小児看護学会誌, 33, 79-88.
- 2) 遠藤麻子, 下野純平, 濱中喜代. (2024). 学童期の医療的ケア児と家族に対する訪問看護師の支援の現状とその課題. 日本小児看護学会誌, 33, 132-140.

【学会発表】

- 2) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代. (2023). NICU 退院児フォローアップ外来における看護実践の実態: 第 2 報—看護実践に対する看護職の思いに着目して—. 日本小児看護学会第 33 回学術集会. 神奈川県横浜市.
- 2) 遠藤麻子, 下野純平, 濱中喜代. (2023). 学童期の医療的ケア児と家族に対する訪問看護師の支援の現状とその課題. 日本小児看護学会第 33 回学術集会. 神奈川県横浜市.

■ 助教 遠藤麻子 (小児看護学領域)

【論文】

- 1) 遠藤麻子, 下野純平, 濱中喜代. (2024). 学童期の医療的ケア児と家族に対する訪問看護師の支援の現状とその課題. 日本小児看護学会誌, 33, 132-140.
- 2) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代. (2024). NICU 退院児フォローアップ外来における看護実践の実態. 日本小児看護学会誌, 33, 79-88.

【学会発表】

- 1) 遠藤麻子, 下野純平, 濱中喜代. (2023). 学童期の医療的ケア児と家族に対する訪問看護師の支援の現状とその課題. 日本小児看護学会第 33 回学術集会. 神奈川県横浜市.
- 2) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代. (2023). NICU 退院児フォローアップ外来における看護実践の実態: 第 2 報—看護実践に対する看護職の思いに着目して—. 日本小児看護学会第 33 回学術集会. 神奈川県横浜市.

■教授 大沼由香(在宅看護学領域)

【著書】

- 1) 大沼由香. (2023). 第5章実習の準備と手続き—教育機関と実習施設それぞれの取組. 尾崎章子(編), 地域・在宅看護実習 実習指導者ガイドブック. 中央法規.

【論文】

- 1) 蔡小瑛, 田中真木, 中村充浩, 松田順, 立石和子, 大沼由香. (2023). Emic (当事者の視点) と Etic (観察者の視点): 真に患者に寄り添うために. 日本看護倫理学会誌, 16. 1. 1-4.
- 2) 大沼由香, 立石和子, 浦山きか, 横手裕. (2023). 看護系大学基礎教育における伝統医療倫理教育の展望—日本と台湾での看護教育経験者の語りの SCAT 分析—. 日本伝統医療看護連携研究, 4. 2. 39-48.
- 3) 工藤遥平, 大沼由香. (2023). 発達障害者の家族支援について—多職種事例検討会による気づき—. 日本伝統医療看護連携研究, 4. 2. 56-61.
- 4) Atsuko, Satoh., Yukoh, Kudoh., Sangun, Lee., Masumi, Saitoh., Miwa, Miura., Yuka, Ohnuma., Naoki, Fukushi., Aya, Ono., & Hidetada Sasaki. (2023). Toe Clearance Rehabilitative Slippers for Older Adults With Fall Risk: A Randomized Controlled Trial. Geriatric Orthopaedic Surgery & Rehabilitation, Volume 12, 1-5.

【学会発表】

- 1) 大沼由香, 太田ゆきの, 芳賀博. (2023). 介護予防自主活動グループの創出と継続支援—仙台市 E 区の委託型地域包括支援センターの取り組み—. 日本在宅ケア学会第 28 回学術集会.
- 2) 太田ゆきの, 大沼由香, 芳賀博. (2023). 住民自主活動グループリーダーの特徴—活動年数 2 年未満と 10 年以上グループリーダーの語りから—. 日本在宅ケア学会第 28 回学術集会.
- 3) 大沼由香, 太田ゆきの, 加藤美幸, 鈴木慈子, 芳賀博. (2023). 介護予防自主活動を支援する委託型の地域包括支援センターの課題. 日本老年社会科学会第 65 回大会.
- 4) 太田ゆきの, 鈴木慈子, 芳賀博, 大沼由香. (2023). 住民自主活動グループの活動継続の特徴—10 年以上活動しているグループリーダーの語りから—. 日本老年社会科学会第 65 回大会.
- 5) 阿部鮎美, 小野寺伯子, 太田ゆきの, 大沼由香. (2023). 「わかる事例検討会」によるオンライン多職種事例検討での事例提供者と参加者の学び—急激に進行する難病者を支援する訪問看護の事例を通して—. 日本ケアマネジメント学会第 22 回研究大会.

■准教授 越納 美和(在宅看護学領域)

【論文】

- 1) 越納美和, 熊田ますみ, 清水ゆかり. (2023). 終末期在宅療養者を看取った家族の思い

とその看護支援方法—看護短期大学(3年課程)における終末期在宅看護の教育方法の検討—, 10-16, 平成医療短期大学紀要, 岐阜.

- 2) 越納美和, 清水ゆかり. (2023). 地域・在宅看護師と助産師の連携による被虐待児の家族支援の検討, 17-23, 平成医療短期大学紀要, 岐阜.
- 3) 清水ゆかり, 越納美和. (2023). 保育者による乳幼児期の子どもへの性教育の現状と課題—助産師・看護師による包括的性教育の取り組みを目指して—, 32-36, 平成医療短期大学紀要, 岐阜.

■助教 加藤美幸(在宅看護学領域)

【学会発表】

- 1) 加藤美幸. (2023). 訪問看護師が行う在宅褥瘡ケアの構造. 第28回日本在宅ケア学会学術集会.

■助教 太田 ゆきの(在宅看護学領域)

【論文】

- 1) 太田ゆきの, 大津美香, 工藤隆司, 沓澤尚子. (2023). 帯状疱疹後神経痛患者の痛みと日常生活への影響～患者の語りから～. 伝統医療看護連携研究, 4(2), 8-18.

【学会発表】

- 1) 太田ゆきの, 大沼由香, 芳賀博. (2023). 住民自主活動グループリーダーの特徴—活動年数2年未満と10年以上のグループリーダーの語りから—. 第28回日本在宅ケア学会学術集会. 大阪府吹田市.
- 2) 大沼由香, 太田ゆきの, 芳賀博. (2023). 介護予防自主活動グループ創出の支援と課題—仙台市E区の委託型地域包括支援センターの取り組み—. 第28回日本在宅ケア学会学術集会. 大阪府吹田市.
- 3) 太田ゆきの, 鈴木慈子, 芳賀博, 大沼由香. (2023). 住民自主活動グループの活動継続の特徴—10年以上活動しているグループリーダーの語りから—. 第65回日本老年社会学会大会. 神奈川県横浜市.
- 4) 大沼由香, 太田ゆきの, 加藤美幸, 鈴木慈子, 芳賀博. (2023). 介護予防自主活動を支援する委託型の地域包括支援センターの課題. 第65回日本老年社会学会大会. 神奈川県横浜市.
- 5) 阿部鮎美, 小野寺伯子, 太田ゆきの, 大沼由香. (2023). 「わかる事例検討会」によるオンライン多職種事例検討での事例提供者と参加者の学び—急激に進行する難病者を支援する訪問看護の事例を通して—. 日本ケアマネジメント学会第22回研究大会. 神奈川県横浜市.

Ⅲ 外部資金獲得状況

清水哲郎（教授：一般教養）

1) 基盤研究（B）（代表）

課題番号：22H00602

研究課題名：臨床倫理システムの倫理的総仕上げと超高齢社会における高齢者のよい人生への貢献

2) 基盤研究（C）（分担）

課題番号：23K10323

研究課題名：看護のリスクングを促進する多職種連携基盤型事例検討法の開発

三浦靖彦（教授：成人看護学）

1) 基盤研究（B）（分担）

課題番号：23H03134

研究課題名：日本の病院における臨床倫理支援の質向上と均てん化を目指した実証的研究

2) 基盤研究（C）（分担）

課題番号：21K02335

研究課題名：看護師を対象とした子どもの権利擁護実践を高める教育プログラム（中級編）の開発

大沼由香（教授：在宅看護学）

1) 基盤研究（C）（代表）

課題番号：23K10323

研究課題名：看護のリスクングを促進する多職種連携基盤型事例検討法の開発

下野純平（准教授：小児看護学）

1) 若手研究（代表）

課題番号：21K17389

研究課題名：早産児の両親を支援するフォローアップ外来における看護援助開発に向けた基礎的研究

大井慈郎（准教授：一般教養）

1) 基盤研究（B）（分担）

課題番号：22H00602

研究課題名：臨床倫理システムの倫理的総仕上げと超高齢社会における高齢者のよい人生への貢献

2) 基盤研究 (C) (代表)

課題番号: 23K01730

研究課題名: 高齢者サロン参加者の居住範囲決定メカニズムの検討: 地域住民組織と支援制度の影響

3) 基盤研究 (B) (分担)

課題番号: 23H00871

研究課題名: 仲介業者に着目したトランスナショナルな階層的地位決定メカニズムの検証

齋藤史枝 (講師: 老年看護学)

1) 基盤研究 (C) (代表)

課題番号: 23K09794

研究課題名: 介護老人保健施設での感染対策を融合した出前型急変時対応シミュレーション研修の開発

大友美恵 (講師: 公衆衛生看護学)

1) 基盤研究 (B) (分担)

課題番号: 20H04012

研究課題名: 在宅高齢者の介護予防における「連想法」の国際的方法の確立と効果の検証

太田ゆきの (助教: 在宅看護学)

1) 基盤研究 (C) (分担)

課題番号: 23K10323

研究課題名: 看護のリスクを促進する多職種連携基盤型事例検討法の開発